

南琉球八重山語宮良方言のアクセント体系に関する初期報告*

セリック・ケナン[†] ^{あそう れい こ}麻生玲子[‡] ^{なかざわ こうへい}中澤光平[§]

1 はじめに

与那国方言のアクセント体系を扱った上野善道の一連の網羅的な研究（上野 (2010, 2011) など）を除いて、八重山語諸方言のアクセント体系に関する詳細な記述研究は少ない。これまでの研究は限られたデータに基づきながら、単純名詞（と若干の複合名詞）におけるアクセント型の対立を主に扱ってきた。このため、各方言で対立しているアクセント型の音声的な実現に関する十分な記述がなく、また、複合語、形容詞、動詞などのアクセント体系はほとんどの方言で全く不明であると言える状況である。

このような背景から、南琉球八重山語の一方言である宮良方言を取り上げ、そのアクセント体系に関する本格的な記述研究を目指す。本研究では、その第一歩として、遠隔調査で一人の話者（男性、昭和8年生）から得られた1570点の音声データを用い、単純名詞と複合名詞において観察されるピッチパターンとその解釈について初期報告を行う。具体的に言うと、先行研究（平山ほか1967）の指摘の通り、単純名詞は2つの型（「下降型」と「平板型」）が区別されることが確認できた。しかし、複合語においては3つの異なるパターン（「下降型」、「平板型」、「境界下降型」）が区別されるという新しい結果が得られた。よって、特に単純名詞に見られない「境界下降型」の解釈について現時点での仮説を述べる。

2 宮良方言

2.1 宮良方言の概要

宮良方言は、沖縄県石垣市字宮良で伝統的に話されている言語である¹。石垣市の南部は縦じま模様のように南北に向かって細長く字が分かれており、宮良は東から2番目に位置する字である。

宮良方言は系統的に八重山語に属するが、八重山語の中の詳細な系統関係は不明である²。Davis (2014, 2016b) は宮良方言の系統的な位置について位置づけが難しいと論じている。歴史的には1771年に起きた明和の津波によって人口が大幅に減少したことにより、小浜島から宮良村への強制移住があったことが知られている（石垣 2013）。ただし、宮良方言の話者の直感によると、小浜

* この研究は本研究は JSPS 科研費 18K12390、19H05353、19K13174 の助成を受けたものです。なお、遠隔調査にご協力いただいた宮良のインフォーマントに感謝を申し上げます。

[†] 国立国語研究所、kcelik@ninjal.jp。

[‡] 名桜大学、r.aso@meio-u.ac.jp。

[§] 東京大学国語研究室、tripole@hotmail.co.jp。

¹ 仲原 (2003) によると、宮良方言の音素体系は子音 17 個（/p, b, t, d, k, g, s, z, c [ts] ~ [tʃ], m, n, r, ŋ, w, j, h, ' [ʔ]/）と母音 6 個（/i, ɪ, e, a, u, o/）からなる。上記の他に /R, Q, N/ の拍音素も認められる。これに対して、Davis (2016b) は /' / を子音音素として認めない上で、/h/ とは別に /f [ɸ]/ の音素を設定する。なお、同じ研究によると母音の長短の対立が確認されているのは /a, i, u/ の 3 つである。本研究では、Davis (2016b) の分析に従うが、語形を IPA 記号で提示する。

² 八重山語諸方言の下位分類について論じたローレンス (2000) には宮良方言が言及されていない。

方言よりも宮良付近で話されている石垣市中心部の方言（石垣四箇方言）の方が理解しやすいとのことである (Davis 2016b:172)。

平成 30 年度の石垣市の統計によると、字宮良の人口は 1837 人（平成 29 年 12 月時点）である。宮良方言の話者人口に関して、Davis (2014) は 2010 年の段階で 500 人前後だと推定している。10 年経過した現在では、それよりも減少していると予想される。

2.2 宮良方言に関する先行研究

宮良方言に関する先行研究は文法を扱ったものが多く存在する。伊豆山の一連の研究 (伊豆山 1997, 1999, 2000, 2001a,b, Izuyama 2003) のほかに、個別の文法現象を扱った研究の蓄積がある (新垣 2000, 下地 2010, Davis 2013, 2015, 2016a,b, Davis & Lau 2015)。

一方で音声・音韻やアクセントに関する研究は文法研究と比べると少ない。音声・音韻に関するものには仲原 (2003), Arakaki (2004), 仲原 (2005), Davis (2016b) の研究がある。アクセントに関しては、平山・中本 (1964) と平山ほか (1967) のみである。アクセントに関する先行研究については 2.3 節で詳しく述べる。

最後に、語彙に関しては基礎語彙を報告した中松 (1987) と、宮良方言話者がまとめた、約 5000 項目を収録した語彙集 (石垣 2013) がある³。ただし、このいずれの語彙集にもアクセント情報が掲載されていない。

2.3 アクセントに関する先行研究

平山・中本 (1964:86) と平山ほか (1967:40-41) に宮良方言のアクセント体系に関する簡単な記述がある。これらの研究によると、宮良方言のアクセント体系は（名詞・動詞・形容詞の品詞を問わず）「下がり目」の有無によって対立する 2 つのアクセント型を持つ。1 つ目のアクセント型は「頭高型・中高型」と呼ばれ、語頭から 1 拍目（「頭高型」）または 2 拍目（「中高型」）の直後におけるピッチの局所的な下降によって実現する (1ab)⁴。2 つ目のアクセント型は「低平型」と呼ばれ、ピッチの局所的な動きを伴わず、平たく発音される (1c)。

- (1) a. 頭高型 : a]kubi 「欠伸」
 b. 中高型 : s̥ika]ra 「力」
 c. 低平型 :]takara 「宝」
 平山ほか (1967:40) より表記一部改変

なお、頭高型と中高型は同じ語でも環境による揺れが観察されたり (2a)、中高型の出現条件に語頭音節の無声化が見いだされたりするなど (2b)、対立するアクセント型として分析されていない。

- (2) a. u]tu 「音」
]u[tu]nu ... ~ utu]nu ... 「音の...」

³ そのほかに宮良は LAJ の地点にもなっている (国立国語研究所 1966)。

⁴ 本稿ではピッチの局所的な上昇・公開を []、ピッチの小幅な下降を !、拍内下降を]] の記号で表し、接語境界を =、複合語境界を + で表す。なお、発話が高く始まることを前提にしているため、発話が低く始まる場合に限って最初に] の記号を添える。

- b. p̥itu 「人」
p̥itu]nu ... 「人の...」

3 データ

本研究で使用するデータは、2020 年 12 月と 2021 年 3 月に行った遠隔調査で得られたものである。協力してくださった話者は宮良出身で現在も宮良地区に在住の男性（昭和 8 年生）である。音声データの収集はマイク内蔵型の IC レコーダー（パナソニック RR-XS470）を話者に送付し、リストの読み上げを録音してもらう形で行った。データのやり取りは録音機本体で行い、音声データは wav 形式で録音されたものである。ヘッドセットマイクを使用した録音に比べると音質は劣るが、ピッチの変動を確認するために十分な音質である。

読み上げリストは『メーラムニ用語便覧』から 600 語の名詞（2 拍～）を適宜に選んで作成した。当該名詞を単独の発話で収録してもらったほか、話者自身が当該名詞について思いついた簡単な用例も収録してもらった。その際、当該名詞を含んでいなかったり、関連する単純語や複合語であったりするなど、様々な種類の「用例」が得られた。音声データは書き起こしを行い、データベースの形で整理した。合計 1570 点の発話データが収納されており、そのうち、778 点は語彙項目の単独発話であるのに対して、残りの 792 点は用例の発話である（重複を含む）。本研究では用例の発話を当該名詞を粹文に入れたアクセント資料として使用している。

4 結果

4.1 単純名詞

本節では、単純名詞（2 拍・3 拍）に関する結果について述べる。結論を先に言うと、先行研究の記述の通り、単純名詞は 2 つの対立するアクセント型（以下「下降型」「平板型」）が区別されることが確認された。

まず、単独発話の音調を見てみよう。単独発話の環境では大きく 2 つのパターンが観察される。第一のパターンでは、大幅なピッチの下降が実現する。このパターンにおけるピッチの下降の実現位置は名詞の長さによっており、2 拍名詞の場合は 1 拍目の直後、3 拍名詞の場合は 2 拍目の直後となる⁵。ただし、p̥itu 「人」のように語頭の音節が無声化している 2 拍名詞はピッチの下降が 2 拍目の中に実現する(3a)。第二のパターンでは、語末拍の直前に小幅なピッチの下降が実現する(3b)⁶

- (3) a. i]zu 「魚」、matsi]ri 「祭り」、p̥i]]tu 「人」
b. ja!du 「戸」、nasa!bi 「茄子」

次に、X=nu Y 「X= の Y (X は対象語、Y は随意の名詞)」の粹文における音調を見てみよう。この環境においてもやはり 2 つのパターンが観察される。第一のパターンでは、2 拍目の直後に大幅なピッチの下降が実現する(4a)。第二のパターンでは、ピッチの変動がほとんどなく文節全体が平たく発音される(4b)。

- (4) a. izu=]nu ... 「魚の」、matsi]ri=nu ... 「祭りの」、p̥itu=]nu ... 「人の」
b. jadu=nu ... 「戸の」、nasabi=nu ... 「茄子の」

⁵ なお、下降が実現する直前の拍が際立って高い。例えば、3 拍名詞の語頭の 1 拍目は 2 拍目に比べて低く発音される。

⁶ そのまれな変種として、語末拍まで平たく発音されるパターンも現れる。

同じ語に対して、単独発話と $X=nu\ Y$ の枠文で観察されるパターンが対応している。つまり、単独発話で大幅なピッチの下降が実現する語は $X=nu\ Y$ の環境でも大幅な下降が実現する。これに対して、単独発話で小幅なピッチの下降が実現する語は $X=nu\ Y$ の環境では平たく発音される。このため、この2つの環境における音調の違いは語彙的に指定されると解釈することができる。よって、宮良方言の単純名詞は少なくとも2つのアクセント型が対立すると言える。そして、現時点では、この2つのアクセント型はピッチの下降の有無によって対立すると想定することができる。具体的にいうと「下降型」は2拍目の直後に大幅なピッチの下降が実現する。これに対して「平板型」はピッチの変動を伴わない。平板型でも単独発話の環境において語末拍のピッチの低下は観察されるが、これはアクセント型とは無関係で、発話末のイントネーションによる現象であると仮定しておく。下降型と平板型の実現を表1にまとめる。以上の結果は先行研究とおおむね一致している。

表1 単純名詞の音調

型	拍数	単独発話	$X=nu\ Y$
下降型	2	$\mu] \mu$ (~ $\mu]] \mu$)	$\mu\mu =] \mu$
	3	$\mu\mu] \mu$	$\mu\mu] \mu = nu$
平板型	2	$\mu! \mu$	$\mu\mu = \mu$
	3	$\mu\mu! \mu$	$\mu\mu\mu = \mu$

4.2 複合語名詞

本節では、2つの単純名詞から成る複合語を取り上げ、その単独発話の音調に関する結果について述べる。

まず、大半の複合語では複合語全体の音調が前部要素によって決まるというパターンが観察される。詳しく言うと、前部要素が下降型に所属する複合語は2拍目の直後に大幅なピッチの下降が実現する(5a)⁷。これに対して、前部要素が平板型に所属する複合語は語末拍までやや高いピッチで平たく発音され、語末拍の直前に小幅なピッチの下降が実現する(5b)。

- (5) a. $s\grave{a}ta^F +]pa^F$ 「下 + 葉」、 $s\grave{a}ta^F +]pa^L$ 「下 + 歯」、 $a:]ri^F + kad\zeta i^F$ 「東 + 風」、 $a:]ri^F + tida^L$ 「東 + 太陽」
b. $tumo:ri^L + i!zu^F$ 「海 + 魚」、 $tumo:ri^L + su!ku^L$ 「海 + 底」、 $hai^L + ka!d\zeta i^F$ 「南 + 風」、 $sabani^L + fu!ni^L$ 「くり船 + 船」

ここで重要なのは同じ前部要素に対してどのような後部要素（下降型か平板型）であっても、複合語全体の音調が前部要素のアクセント型と完全に一致することである。つまり、これらの複合語においてはいわゆる「複合アクセント法則」（上野 2012）が成立していると言える。

しかし、一方で複合アクセント法則で説明できない複合語も観察された。これらの複合語は前部要素が平板型であるのにもかかわらず、複合語の境界においてピッチの下降が実現する(6)。

⁷ 以下の例では語根のアクセント型を F (Falling = 下降型) と L (Level = 平板型) の上付き文字で示す。

- (6) a. $\text{si}^{\text{L}}\text{ma}^{\text{L}} +]\text{zi}^{\text{L}}\text{ma}^{\text{L}}$ 「島 + 島」
 b. $\text{ma}^{\text{L}} +]\phi\text{a}^{\text{F}}$ 「孫 + 子」

さらに、これらの複合語における下降は下降型で実現する下降と性質が異なるようである。具体的に言うと、前部要素が下降型で複合アクセント法則が適用される場合、語頭から2拍目にピッチのピークが実現した後、語末に向かってピッチの大幅な下降が実現する。これに対して、(6)の例のように前部要素が平板型の場合、複合語の形態素境界においてピッチの下降が実現する。つまり、下降型の特徴的な2拍目のピークが観察されない。(6)の例で見られるパターンを「境界下降型」と暫時的に呼んでおく。

5 考察

前節で見たように、複合語では複合アクセント法則が適用されるパターンとは別に、複合アクセント法則で説明できない「境界下降型」のパターンが確認される。境界下降型の解釈について次のような可能性が考えられる。第一に、複合アクセント法則が成立することを前提に、境界下降型は前部要素のアクセント型による。つまり、平板型の中に複合語における音調を基に2種類の異なるアクセント型をたてることになる。しかし、その場合、対立するこの2つのアクセント型は単純名詞の環境において完全に中和するというアクセント体系を想定する必要がある。第二に、語彙的に指定されるアクセント型とは別に、特定の（韻律的あるいは構造的な）条件の下で起こる「形態素境界における下降」という現象が存在する。その場合、境界下降型になる複合語には何らかの偏りが観察されると予測される。

現時点では、どの解釈が適切であるかを検証するためには十分なデータがないが、境界下降型となっている複合語は少数で、特殊な構造を持つことが指摘できる。つまり、前節の(6)に挙げられている複合語のうち、1語は重複形であり、もう1語は並列の構造を持っている。よって、第二の解釈が正しく、このような構造をもつ複合語は境界下降型で実現する可能性がある。

6 おわりに

本発表では、八重山語宮良方言のアクセント体系に関する初期報告を行った。第一に、先行研究の結果を確認し、単純名詞は2つのアクセント型、すなわちピッチの下降を伴う「下降型」とピッチの変動を伴わない「平板型」が区別されることを示した。第二に、複合語の音調に関する結果を報告し、複合アクセント法則が成立するパターンのほかに、形態素境界に下降が生じるパターン（「境界下降型」）があることを指摘した。第三に、アクセント体系や境界下降型に関する現時点での仮説について述べた。今後、データを増やし、宮良方言のアクセント体系の分析を深めることが望まれる。

参考文献

- 新垣公弥子 (2000) 「沖縄県石垣市宮良方言の活用体系」 『千葉大学日本文化論叢』 (1), 108–96.
 Arakaki, K. (2004). The System of Phoneme in the Ishigaki Dialects of Luchuan: The Miyara Dialect. 『千葉大学日本文化論叢』 (5), 106–87.
 石垣實佳 (2013) 『メーラムニ用語便覧』 南山舎.
 伊豆山敦子 (1997) 「琉球・石垣宮良方言の動詞語形変化」 『獨協大学教養諸学研究』 **31** (2), 1–26.
 伊豆山敦子 (1999) 「八重山・宮良方言動詞言い切りの形と意味・用法-琉球方言のテンス・アスペクト・モデル研究のために」 『獨協大学諸学研究』 **2** (2), 111–133.

- 伊豆山敦子 (2000) 「琉球・八重山・石垣 (宮良) 方言の動詞言い切りの形」『アジア・アフリカ文法研究』(29), 65–91.
- 伊豆山敦子 (2001a) 「琉球・八重山 (石垣宮良) 方言条件表現とアспект・モダリティー的側面」『マテシス・ユニウェルサリス』**2** (2), 1–26.
- 伊豆山敦子 (2001b) 「八重山 (石垣宮良) 方言の「過去」をめぐる問題点」『マテシス・ユニウェルサリス』**3** (1), 69–91.
- Izuyama, A. (2003). The Grammar of Ishigaki Miyara Dialect in Luchuan. In A. Izuyama (Ed.), *Endangered Languages of the Pacific Rim Studies on Luchuan Grammar*. Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University. 1–162.
- 上野善道 (2010) 「琉球与那国方言のアクセント資料 (1)」『琉球の方言』**34**, 1–30.
- 上野善道 (2011) 「与那国方言動詞活用形のアクセント資料」『琉球の方言』**35**, 105–121.
- 上野善道 (2012) 「N 型アクセントとは何か」『音声研究』**16** (1), 44–62.
- 国立国語研究所 (1966) 『日本言語地図第 1 集: 付録 A 日本言語地図解説: 方法』国立国語研究所.
- 下地賀代子 (2010) 「石垣・宮良方言の係助辞-du の文法的意味役割」『日本語文法』**10** (2), 143–159.
- Davis, C. (2013). Surface position and focus domain of the ryukyuan focus particle du: Evidence from miyara yaeyaman. *International journal of Okinawan studies*, **4** (1), 29–49.
- Davis, C. (2014) 「宮良方言」石原昌英 (編) 『文化庁委託事業危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究 (八情報源・国頭方言・沖縄方言・八重山方言) 報告書』国立大学法人琉球大学国際沖縄研究所, 93–101.
- Davis, C. (2015) 「八重山語宮良方言の動詞屈折論」狩俣繁久 (編) 『琉球諸語記述文法』I, 琉球大学, 沖縄, 120–136.
- Davis, C. (2016a) 「八重山語・宮良言葉: 記述文法と学習資料に向けた形容詞の記述」琉球大学国際沖縄研究所 (編) 『シマジマのしまくとぅば: 危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究: 文化庁委託事業報告書』I, 琉球大学島嶼地域科学研究所, 137–144.
- Davis, C. (2016b) 「八重山語宮良方言の音素目録と定動詞屈折形態論」狩俣繁久 (編) 『琉球諸語記述文法』II, 琉球大学, 沖縄, 172–190.
- Davis, C., & Lau, T. (2015). Tense, aspect, and mood in miyara yaeyaman. In H. Patrick, S. Miyara, & M. Shimoji (Eds.), *Handbook of the Ryukyuan languages: history, structure, and use*. De Gruyter Mouton.
- 仲原穰 (2003) 「石垣島宮良方言の音韻研究序説」『琉球の方言』**27**, 139–157.
- 仲原穰 (2005) 「小浜方言と宮良方言の音韻の比較研究」『琉球の方言』**29**, 107–120.
- 中松竹雄 (1987) 『琉球方言辞典』那覇出版社.
- 平山輝男・中本正智 (1964) 『琉球与那国方言の研究』東京堂.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』明治書院.
- ローレンス・ウエイン (2000) 「八重山方言の区画について」石垣繁 (編) 『宮良當壮記念論集』宮良當壮生誕百年記念事業期成会, 547–559.